

比較思想への方法的通路としての直観

竹原 弘

はじめに

比較思想と云う學問は、異なつた思想圈に属するそれぞれの思想を比較する事であり、したがつてそこには思惟の形態の相違が前提とならなければならぬ。しかしながら、また比較するといふ事は、或る共通の基盤の上に有るものどうしの間でなければ可能ではない。それでは、思想を比較する上における共通の基盤とは何であるのか。それはまず、最も広い意味では、生物学的意味での人間であること、つまり例えれば思惟器官である大脳組織等々である。様々な人間の営みは、そうした類的属性としての大脳組織の機能に大きく依存しているといつてよいだろう。しかしながら、人間のそうした営みには様々なものがあり、その所産としてあらゆる文化圏において文化を形成している要素には多岐にわたるも

のがある。そこで次には、云わゆる思想としての所産に限定し、思想といふ共通の基盤を設けること、つまり限定をしなければならない。何故ならば、同じ人間の営みの所産として文化を形成するものでありますながら、またたく間に異なる範疇に属するもの、例えば建築物と思想とを比較することは出来ないわけだから。したがつて、人間と云う有機体の営みの所産としての思想といふ共通基盤を設けることが必要である。そして、こうした共通性の上に、云わばア・ボスティオリな契機として、その思想圈の背景である文化社会的慣習、言語習慣として、具体的なかたちをとるわけであるが、こうした独自性が思想の独自性、つまり思惟の仕方の独自性を形成するものであると云つてよいであろう。したがつて、思想の比較は、こうした前者の人間といふ共通性からの思想と云う共

通の形をとった所産と、人間がその思想を作り上げる過程において、人間のア・プリオリな基本的思惟機能に、ア・ポステリオリな作用を為し、相異なった思想を形成せしめた、様々な独自の文化形態という相違性の契機の「契機を入れる必要がある様に思われる。そして、この小論では、ア・ポステリオリな契機としての文化形態と思惟との関わりについて論ずることにしたい。」

一 ベルグソンの記憶の一形狀

思惟形態の相違は、例えば東洋と西洋といった様に、空間的、地理的な相違のみではなく、時間的な相違もある。同じ西洋的思惟でも、古代ギリシアと近代ヨーロッパでは明らかに思惟形態の相違が見られる。それ故、思惟形態の相違は、空間的な面から見ると、のみでは一面的の責めを免れないであろう。したがって、時間的、空間的という両側面から、思惟形態の相違を明らかにしてゆくべきであると思う。そうした試みとして、ベルグソンの記憶理論と、ソシュールの言語学、それに主題である直観との相互連関のわざ、思惟形態の相違の根拠を求めてゆきたいと思ひ。

まずベルグソンの記憶理論に関してであるが、彼の記憶に関する考察は、彼の第二の主著である『物質と記憶』*Matière et mémoire* の第一章において為されてくる。そこにおいて、ベルグソンは記憶を二つに分類している。すなわち、身体的記憶 *la mémoire motrice* へ精神的記憶 *les images-souvenirs* である。

我々が何か或る一つの文章を暗記しようと努力する場合を例にとって考えてみたい。その場合、我々はまず、その文章を暗記するため何度も読む。そして新らしく読み返すたびに進歩のあとが見られ、言葉と言葉はだんだんよく結びついて来て、ついにはひとまとまりになる。そしてその時に、その文章を暗記した事になる。その場合に、その文章は云わゆる記憶となつて記憶力のうちに蓄積されたのであるといわれる。しかしながら、そうした記憶として精神に刻印されたその文章とは区別された、もう一つの記憶の存在をベルグソンは指摘している。すなわち、その文章が暗記される過程を思い浮かべて見た場合、その過程においてなされた努力は、そのおのおのが、特有の個性を帯びたものとして表象される。我々はそれらを、それらに随伴する様々な状況と共に想起するのである。そして、それらは時間の中で占める位置によって、それ以前的努力からも、それ以後の努力からも区別される。つまり、そのおおのの暗記努力は、我々の歴史の唯一の出来事として有るのである。こうして見るならば、暗記された文章ど、それを暗記するに到る諸々の努力についての記憶とは明らかに違うものであり、それらについて我々は明確な区別をつけなければならぬ。つまり、暗記された文章は、暗記された限りでは、習慣の特徴をことじとくそなえており、習慣と同じく、それは同じ努力の反復によって獲得される。それは過去に属するというよりむ、常に身体によって現在の場で再現されるわけであり、過去を

表象する限りども、過去を演じるやう。したがつて、それは時間的には現在に位置し、また一般性としての性格しか有しない。

（まゝ）暗記された限りでの記憶は、暗記された様々な独自な状況をすべて捨象しており、ただ記憶力の内に獲得された限りでの、その文章のみを有する。こうした記憶を、ベルクソンは身体的記憶とよび、もう一つの精神的記憶と明確に区別する。精神的記憶は、云わば思い出であり、それはそのおのが自由性を有し、一般性へと還元出来なものとして、自己の歴史において独自な時間的位置を持つものである。こうしたベルクソンの記憶の二形式は、物質と記憶の中では、身体と精神の二元論への適用として展開されており、これらの一いつの記憶の連関の問題が即、身心問題となるわけである。しかしながら、ここではそうした問題には触れず、こうした記憶の二形式を手掛りとして、思惟形態の問題へとすすみたいと思ふ。

一一 記憶と言語機能

我々の思惟に対する言語は本質的な関わりを持ち、言語が与えられなければ、我々は思惟するとはおろか、我々の日常面でいる世界を秩序付けることが出来ないであろう。それ故、言語は我々にとって、単なる記号ではなく、我々がそれを介して思索する、思索の素材にほかならないのである。

我々が言語を獲得し、その言語を自由に駆使しうるためには、

スイスの言語学者フンタール Ferdinand de Saussure は『一般言語学講義』Cours de linguistique générale において、言語を二つに分類してゐる。すなはち、langage と langue。それに parole やねる。langage は、人間の持つ普遍的な言語能力及び言語活動の事であり、それがもいて人間を他の動物から明確に分かつる基準である。また langue とは、そつた langage が個別の社会において、自由の構造を伴つた、一種の社会制度へ化したものである。つまり、langage の顕在化である。そして、parole とは、個人が langue の規制と条件に従つて自己の意志を言表する具体的な行為を示す。ソントールの言語学の対象は、主に language つまり社会制度として個々の社会に定着したものとしての言語である。ソントールの扱うのは、主に言語構造、つまり個々の言語を言語たらしめている法則としての文法体系の法則である。しかしながら、思惟形態を問題にする場合には、そうした言語構造のみでは、十分分解出来ないのであり、したがつて、これに言語内容を加えてやきたいと思う。そして、きわめて大まかな類型化であるが、ベルクソンの記憶の二形式をこうした言語に適応するならば、言語構造が身体的記憶に属し、言語内容が精神的記憶に属するといふ事になる。しかしながら、こうした分類は便宜的であり、実際の我々の思惟は、これらの間の相互連関なしには有りえないものである。

まずベルクソンの記憶の二形式で云うならば、身体的記憶における運動的機能として、つまり習慣化されたものとして、自分の身体へその言語の文法規則を定着させなければならぬ。我々が言語を習慣化するためには、まず様々な簡単なセンテンスを記憶の中に習慣化せしめる事により、今度はそうしたセンテンスを様々な形で應用して使用出来る様になる。当然記憶されたセンテンスは、言語である限りは、意味を持ち、内容を持ってるのであるが、しかしながら習慣化により身体的記憶がそれらのセンテンスから得るのは、それらの持つ意味内容であるよりは、むしろそれらのセンテンスに内属している言語の規則である。もし、我が身体的記憶が記憶したセンテンスの意味内容にこだわっていなならば、我々はそのセンテンスを應用して、様々な意味内容に転化する事は出来ないのである。それ故、身体的記憶が獲得するのは、言語の規則、つまり言語を支える構造であるといふことになる。その様にして獲得された言語構造は、話者には自覚されない場合がほとんどである。つまり、我々は文法を学ばなくとも言語を使用出来るわけであり、それと云うのも、言語の構造としての文法体系は、身体的記憶として習慣化されることにより、自動的に機能するからである。

我々が云わゆる第一言語として、最初に獲得する言語は、我々

の属している社会において通用している言語、つまりソシニール流に云うならば、langueである。それはソシニールによるならば、個々人の頭脳の中に蓄積していくながら、個々人にとつては左右しえない超越的なものとして、個々人を制約するものである。つまり、langueはその社会に属する成員の間に暗黙のうちに結ばれた契約によって成立しているものである。その様にして獲得された言語構造がまず我々の思惟を規定する。と云うのは、我々はそうして社会から獲得した言語構造に基いて、思惟せざるをえないのであり、従つてそうした言語の文法体系は我々の思惟についての基本的な枠組みとなるのである。こうした言語の構造は意識の内に、独自の思惟空間を構成し、思惟の場を開示するのである。すなわち、その思惟空間は、言葉と言葉との関係、すなわち言葉相互の結びつきの諸規則によつて切り開かれ、そのことにより種々様々な言葉が行きかう或る独自な場面が開拓される。この思惟空間に基き、我々の言語表象が可能になるわけであり、我々はその内部において、様々なセンテンスを組み立てるのであるといえる。従つて、言語構造の相違、つまり文法体系の相違は、当然それによつて開示せしめられる思惟空間を異なつたものにせしめるのである。例えば、我々日本人は、一般的に云うならば日本語と云う言語を社会から与えられるのであり、従つて我々は日本語の持つ文法に則して思考せざるをえない。また、ドイツ人はドイツ語の持つ文法に則しての思惟を運命付けられている。日本語

とドイツ語の言語の構造は、当然の事ながら異なっており、した

がつておのおのの言語構造に則して開示せしめられる思惟空間も違ったものとならざるをえない。一例をあげると、日本語の場合には動詞が文の最後に来るが、ドイツ語の場合は、動詞は主語のすぐ後に来ると言ふ相違がある。またドイツ語等のヨーロッパの言語には日本語にはない関係代名詞がある。こうした言語の持つ構造の相違は、それに基いて言表された或る内容を持つ言説に、単に表現の違いやニュアンスの違いとしてのみ表われるのではない。言語構造は、それの持つ客観的かつ超越的なカテゴリーとして、我々の思惟の展開の仕方を秩序付けると共に、或る強制的な圧力によって、そのカテゴリーを思惟に押しつける。それ故、おのおのの言語の持つ構造の相違は、思惟の形態に対しても重要な契機となるのである。こうした事は、単に空間的観点、つまりドイツと日本とかについてのみ云われる事ではなくして、時間的な観点からも同じ様な事が云われうる。ソシユールによるならば、言語というものは、言語の根柢す本質的性格により、時間的推移からまぬがれる事は出来ない。つまり、極めて恣意的な言語習慣に基づく、言語を構成する或る要素の微妙な変化が、文法全体へと影響を及ぼし、それが長い間の時間的推移により、まったく異なつた文法体系へと変化してゆくわけである。それ故に、同じ言語共同体に属していても、時代が違うならば、異なつた文法の言語を与えられる。従つて、時代によつても、異なつた思惟形態が生じ

て来るわけである。

こうした言語構造に対して、今度は言語内容について考えてみよう。言語構造は身体的記憶に運動機能として、云わば身体の運動図式として定着するわけであるが、言語内容は精神的記憶の中に蓄積される。しかし言語構造と区別された言語内容とは便宜的なものであり、当然の事ながら、言語構造から分離された言語内容なるものは存在しえない。何故ならば、言語構造から分離せしめたものは、もはや言語としての意味も機能も果たし得ないのである。唯一の文字でさえも、それが言語としての意味を持ちえるのは、その言語の規則の体系の中においてのみである。

身体的記憶と精神的記憶は、ベルクソンの哲学においては相互作用的であり、身体の行動において関連し合う。すなわち、我々の実際の思惟においては、身体に刻印された限りでの運動図式としての言語機能が、内容を与える精神的記憶に対して意識化への通路を開くのである。つまり、独自の意識の場を開拓し、そこに個々の意味を含む言語が往来しえる空間を構成するのは運動機能としての身体的記憶へと与えられた言語の文法体系である。我々が言語を自由に駆使出来るのは、言語の持つ規則を運動機能として、身体へと定着する限りにおいてであり、その事において様々な具体的言語のパターンを得る事が出来るわけである。従つて、身体的記憶として獲得された言語構造は手段化されることにより、同一の構造をもつ言語内容を得る。得られた言語内容は、あくま

で言語構造を内属させているわけである。

ソシユールによるならば、我々の生活世界は、言葉を知る以前からきちんと区分され、分類されているのではない。それぞれの言語が既成の概念や事物に名称を与えるのではなく、むしろ反対であり、言葉があつてはじめて概念が生まれるのである。例えば「牛」は、フランス語では *beuf*、英語では *ox* とよばれているが、しかしながら「牛」と *beuf* や *ox* は、それぞれ異なる外延を持つ概念であり、それぞれの語が生まれる以前には存在しなかつた概念である。つまり厳密に云うならば、まったく同一の対象を指示する言語はないのであり、翻訳する場合には、フランス語の *beuf* は、英語では *ox* となるのであるが、しかしながら両者の意味する範囲は異なるのである。こうした例は、セントランスを構成する要素としての言葉の持つ意味内容の相違であるが、当然そうした個々の単語の持つ意味内容の相違は、それらの結合によって作られるセンテンスが意味する内容をも相違せしめる。こうした事を、もっと極端に押し進めてゆくならば、或る国や言語に有る言葉が別の国語には無いと云う場合も生じて来る。先の「牛」の例はフランス語と英語の間の意味の相違であったが、これを見れば、インドとフランス、あるいは中国とドイツと云う様に、比較する対象をより引き離すならば、今述べた様な事が生じて来るわけである。言語とは、一つの社会制度であるが故に、それはその言語の属する社会的慣習の反映である。従って、社会

的慣習のまったく異なる地域間で通用する言語を比べてみると、そこに個々の単語の意味の相違ばかりではなく、一方の地域の言語に有る言葉が、もう一方の地域には無いといった事も有りうるのである。人間の思惟は言語を媒介として為されるのであるならば、こうした地域による言葉の持つ意味の違いや、言葉の種類の相違は思惟の地域的特性を際立たせる大きな要因となるであろう。

言葉は、その社会に密着したものとして、その社会での様々な社会的慣習によつて作り出されるのであるが、その社会的慣習たるや多岐にわたるものである。宗教的儀式に関するものから食生活に関する慣習に到るまで、様々な慣習があるのであり、そうした慣習を維持するためには、そうしたものに関する言葉が当然必要となつてくる。こうして、こうした社会的慣習によつて作り出された言葉は、その社会における思惟の前提を形成する。すなわち、思惟する場合に、どうしても踏まえなければならず、またそれに依存し、それによって正当化されるべき、こうした思惟の前提と云うものが、社会的慣習によつて作り出された言葉によって形成されるわけである。こうした思惟の前提が、思惟の仕方、思惟の形態を大きく規定する事は、当然の事である。従つて、例えば古代インドにおける生活習慣の相違と古代ギリシアの生活習慣の相違はそのまま、思惟の前提の相違となつて来るわけであり、古代インドの思惟の仕方とギリシアの思惟との違いの原因となる

のである。この事は、また時間的な面、つまり歴史的観点から考
えて同じである。

三 直観とその相違の根拠

以上の如く、言語を通して思惟の形態の独自性、すなわち比較される思惟の差異の根拠を見て來たのであるが、しかしながら以上の如き観点からのみでは、云わゆる思想の形態に関してまでは説明出来ないであろう。云ふのは、言語が使用される平均的レヴェルは日常生活と云うレヴェルである。ここにおける日常的な思惟と、思想という形に結実された思惟の形態とは区別されなければならない。当然、思想も日常的思惟を何らかのかたちで踏まえており、それに依存するところは大きいわけであるが、しかししながら、そうした日當的思惟の根底を突き破り、或る飛躍をとげる事によってのみ思想が形成されるのである。そこで日常生活において使用される言語を思想表現のための言語にまで高める原動力は何かと云う事が問題となる。それを、テーマである直観と云う事に求めたいと思う。直観は論理的な思惟とは区別される。演繹も帰納も共に論理的手続きを踏み、かつ言語に則した言語的思惟である。従つてそれらは、言語に記された概念を構築してゆく作業である。それに対して直観とは、そうした言語的思惟の根底に有るものであり、それはまた既成の言語的思惟の制約を破るものである。それは、論理的な思惟ではなく、また言語的な形象

を持ったものとして表象されるものでもない。直観はひとりのひらめきであり、思惟の飛躍であると考えてもよい。例えば、ニーチェは『この人を見よ』の中で次の様に述べている。

「一八八六年の秋皇帝（フリードリッヒ三世）がこの忘れられた小さな幸福境（サンタマルゲリータ）を最後に訪れた時に、わたくしはまたまた再びこの海岸にきていた。——この二つの道で、『ツアラトウソトラ』第一部全体が、とりわけ典型としてのツアラトウソトラ自身が、私の心に浮かんだのである。もつと正確に云えば、彼が私を襲つたのだ。」⁽⁷⁾

このニーチェの思惟体験は、論理の構築を媒介として、その結果見い出された思惟内容といったものではなく、「襲つた」と云う表現を見てもわかる通り、それはそうした論理的手続きを経ずに、直接的に与えられたものであると推察する事が出来る。そうした言語表象以前の思惟体験とはいかなるものか。我々の日常生活の中の体験から類推してみたい。

例えば、誰かとの会話の途中で、或る人名あるいは或る事柄の名称を云おうとして突然忘れてしまうといった場合がある。その時に、話し相手が、色々な名前を出して、その忘れた名前を思い出させようとする。その場合、忘却した側の者は、相手が出す名前に對して判断を下す。つまり、自分が今云おうとして忘れた事柄は、相手が出した名称と同一であるとか違っているとかいった判断を下す。しかし、ここで注目したいのは、その判断の根拠は何かと

云う事である。自分が忘れてしまつた事柄に対して判断を下すわけであり、その場合何を根拠にして判断を下すのであらうか。或る事柄についての名称を完全に忘れ去つてしまつていてない場合、その事柄に関する漠然とした印象、あるいは何らかの情緒が意識の中に残る。それは、自己とその事柄との関わりにおいての、自己にとっての意味感情の如きものであり、忘却された事柄の言語表象に付着しているものである。それについての言語が忘却された後も、言語と分離したかたちでその意味感情のみが意識の内に残存する。それが判断の根拠となるのである。従つて、その場合相手によって提示された事柄の言語に付着している意味感情と、忘却してしまつた事柄に付着しており、かつそれと分離したかたちで意識内に残存している意味感情とを、照らし合わせて判断するのである。こうした言語表象に付着した印象のみが意識の中に残存している状態は、おそらく意識と無意識との境にその事柄が位置している場合であろう。それは完全に無意識の領域に移行しているわけでもなく、また意識の領域に有るわけでもない、中ぶらりんの状態である。

直観とは、ちょうどその逆の方向を持つものとして理解される。つまり、無意識層から意識の領域へと心的エネルギーがつき上げて来る時に、それはやはり先に述べた様な漠然とした印象として、あるいは感情として意識されるのである。それはまだ言語によって形象を与えていない、言語化以前の意味感情である。すな

わち、直観は或る何らかの言語によって表現されうる可能性をもつところの、つまり言語化への志向性を持つ、漠然とした印象として意識に与えられるのである。先の忘却の例は、言語とそれに付着した意味感情との分離によって意識内に意味感情のみが残った場合であり、その場合には言語が先にあって、それが半ば忘却された状態であったが、直観によって与えられたものは、まだそのままの意味感情に言語が与えられない状態である。従つて、両者の非言語的印像は異質なものであり、区別されるべきものであるが、しかし前者からの類推によって直観と云うものを考えてみたわけである。既成言語に付随する意味感情は、我々の現実生活における、その言語の意味する事柄との関わりから生ずる、或る種の価値のエモーションであり、従つてそうした意味感情は生活の場から得られたものであると云えよう。しかしながら、直観と云う心的出来事に付随する感情はいつたい何處に由来するのだろうか。

直観は、それによって思想が生まれる、「云わば思想の摇籃」であり、その中に、言語化される事によって或る一つの思想が開花しうる要素が内在しているのである。従つて、直観の異質性が問題となる。東洋と西洋との思维形態の相違は、より根源的には直観によって意識に与えられた意味感情の相違であり、云い換えるならば言語化への志向性の相違である。先に述べた様に、言語を忘却して、それが意識と無意識との境にある場合には、それは印

象としてのみ意識に残存しているのであるが、直観によつて与えられた意味感情は、いまだ言語的形態を与えられていないままの、云わば言語化以前のものである。そして、そうした意味感情は、言語の忘却の場合とは異なつて、言語化される限りにおける、つまり言語化への志向性を有する限りにおける意味感情である。つまり、意味感情とは、我々の現実生活における我々の実存との関わりの上で、我々の実存にとっての或る価値のエモーションであるならば、直観によつて与えられた限りでの意味感情は、厳密に云うならば、我々の実存との関わりと云う媒介を経ていないが故に、それは言語化への途上にあるものとしての潜在的意味の感情であると云うのである。つまり、或る言語によつて形態を与えられる可能性を持つものとしての、意味を有する感情であると云えよう。我々の言語表象は、先にも述べた様に、その一つ一つが意味感情を伴つてゐるのであり、我々が或る単語一つを表象する場合でも、或る価値の感じを伴つて表象するのである。それ故、直観によつて与えられた意味感情は、言語そのものを志向するのではなく、言語に伴つているその価値の感じへと志向するのであると云つて良いだらう。そして、直観の作用が無意識層から意識への心的エネルギーであるならば、直観的所与としての形象化以前の意味感情は、無意識的領域から汲み取られたものであると云ううのではないだらうか。つまり、直観の独自性の根拠は無意識層に有るのではないだらうか。無意識層と云つても、精神

分析学では幾つかの無意識層を分類しており、单一ではないのであるが、ここでは潛在意識、つまりフロイトの云うところの前意識としての無意識層について考えてみたい。ベルグソンによるならば、我々は記憶をすべてつねに意識化しているわけではなく、その大部分が忘却された状態にある。従つて、そうした忘却された記憶が貯蔵されている領域が必然的に存在する事になり、それが潜在意識であると云つてよい。ベルグソンが問題とする潜在意識は主に精神的記憶に関してである。しかしながら、ここではむしろベルグソンの云う身体的記憶に注目してみたいと思う。と云うのは、精神的記憶は、言語記憶を除いては、ほとんどが個人的記憶であり、個人の歴史の蓄積以外の何ものでもない。しかしながら、ここで扱うのは、国民的、民族的レヴェルでの主觀性の問題であるが故に、考察の対象は身体的記憶である必要がある。何故ならば、身体的記憶は既に述べた如く、思惟行為を含めた様々な身体的振舞いの習慣化されたものである。先には言語に関する身体的記憶についてのみ述べたのであるが、もちろん、習慣とは言語のみではなく、言語はその一部分である。我々が日常生活において身についた習慣をすべて身体的記憶とよんでいいのである。そして、我々の身体に記憶された習慣は、言語を含めてすべて社会的なものである。それは、或る時代の或る社会の身体への反映である。我々の振舞いは、思考を含めてすべて社会から獲得したものであり、我々は社会的に思考し、社会的に行はれてゐるので

あるとしてよいであらう。そうした社会的習慣の沈没としての身体的記憶も、やはり潜在的な層を形成する。身体的記憶は、ついにすべて身体的機能として機能してくるわけではなく、それ故、必然的に潜在的な層を形成する事になる。そうした潜在的領域が直観に独自な感情を与えるのであるといふ。すなわち、心的エネルギーは潜在領域から独自性を汲み取るのであり、それを意識へともたらすのであると言える。今まで、思维形態の相違の根拠の契機として、言語構造、言語内容が取り上げられたが、それらはすべて社会的なものであり、時間的、空間的な制約をうけた、或る社会の特異性の反映であった。そして直観もまた、社会的制約によつてその独自性が説明されたわけである。そうした中で、直観はいかなる積極的な役割を果たすのであるかといふことが問題となる。

直観とは、既に述べた様に、日常言語を思想へと昇華せしめる、知的エネルギーである。あらゆる思想の背後には何らかのかたちで直観が働いてゐることは、ベルクソンの指摘する通りである。それは、それに伴う知的感覚により、日常の思惟の地平を破り、新らたな地平を切り開くわけであり、すなわち、日常的言語を思想的言語にまで高める働きをする。つまり、言語に思想的意味を付与する作用を為すのである。従つて、直観的所が意識の領域で言語によって形象化されることにおいて、直観は漠然とした形の無るものかの言語と云ふ形を得て、いわば物質化されると共に、

自己に形態を與える言語を、思想的領域まで高める作用をする。それに伴つて、直観は、社会の反映としての身体的記憶から汲み取った地域的、時代的独立性、すなわち或る時代の或る地域の有する特質を、言語へ結実する過程におよび、言語表現に刻印する。そして、それは言語の構造に従つて、その社会の有する思想の前提を踏まえながら言表されるのである。

ところで、東西の様々な思想は、直観と云ふ形で意識化され言表されるといふアロヤスを踏みながら、おののの独自な思维形態をとるのである。つまり、様々な地域の様々な時代の思维の特質は、以上の如き諸形式によってある程度解明されるのではないか。

(一) H. Bergson; *Matière et mémoire* p.83~p.96 によるベルクソンの記憶の「形体」と「精神」的な記憶はどのようにならう。

原語訳文に誤すべし、運動的記憶力の記憶像となるが、一度、東大出版版「フランスの哲学」一巻の清水誠氏の論文「ベルクソンと生きられる空間」の中で用ひられてゐる、この身体的記憶と精神的記憶との訳語を用いた。

(2) F. de Saussure; *Cours de linguistique générale* p.25~p.30

雑誌「言論」一九二八・三四四・五七八

(3) 言語構造を研究する文法体系の意味を使つてゐるが、クロード・ルカニエトローベル、彼の著書の一つである「構造人類学」

（必ずしも書房）の「目次」に載つてゐる。

(4) F. de Saussure; *Cours de linguistique générale* p. 31

(5) ibid. p.110~p.112

(6) ibid. p.158~p.160 雜誌「言論」一九二八・三四四・九七八

(7) 河出書房新社、世界の大思想版、二一チエ「この人を見よ」秋山

英夫訳 三八四ページ

(8) 精神分析学では、人間の精神の無意識的領域について、幾つかの層を考えている。フロイトは前意識と無意識の大きく分けて二つの領域を考え、前者は意識可能な領域、後者は意識に影響を及ぼしはあるが、夢とか、精神分析の方法によらずには、意識化されないものである。

(9) H. Bergson; *la pensée et le mouvant*, p. 118

(たむなし・らぬし) 哲學、大正大學大學院)